〈論　　文〉

移民史とユグノーの経済活動

金　哲　雄

1　はじめに

移住＝移民は今日世界の中心的課題であり、現代は「移民の時代」といわれている。国連人口統計局によると、国外移民の数は2010年に２億1400万人と推定され、世界人口に占めるその割合は３％に相当している[1]。この「移民の時代」は、人間が複数の境界を越え、様々な土地に移動し住み着く、移住＝移民の歴史によって築かれてきた。それゆえ、現生人類誕生以降のほぼ一万年にもわたる移民史に関する研究は、ますます重要性を帯びてきているのである。

移民としてのユグノーは、ユグノーの存在を認めないナント勅令廃止（1685年）に伴って、約20万人がフランスを出国したといわれている。そのうち、４万から５万人がイギリスに、約１万人がアイルランドに、５万から６万人がオランダに、約３万人がドイツに、約２万2000人がスイスに定住した。あとの残りはヨーロッパの他の諸地域や南アフリカ、アメリカに移住した。亡命初期のスイスを除きすべての亡命先で、ユグノーは歓迎され、あらゆる財政的援助や特権が与えられた。彼らはイギリス、オランダ、ドイツ、スイスなどで新たな産業を移植し、彼らの熟練、特殊な技術を伝えることによって、亡命先の資本

1　Russell King, *The Atlas of HUMAN MIGRATION: Global Patterns of People on the Move*, 2010. ラッセル・キング編著、竹沢尚一郎ほか共訳『移住・移民の世界地図』丸善出版、2011年、11ページ。

主義的発展において大きな役割を果たしたのであった[2]。

筆者は、『ユグノーの経済史的研究』において、ユグノーがプロテスタンティズムの倫理の持ち主であり、しかも少数の被圧迫者であったことが、彼らの移住先を含めて近代西欧における経済発展の中心的担い手になりえたことを具体的・実証的に検証した。しかし、このようなユグノーの経済活動が移民史においてどのように位置づけられるのかが、残された課題の一つになっていた。

以上のような問題意識に立脚して、本稿では、移民史に関する最近の研究成果を踏まえ、ウェルナー・ゾンバルトの移住論やマックス・ヴェーバーの近代資本主義論から示唆を受けながら、ユグノーの経済活動が移民史においてどのように位置づけられるのかを明らかにしていきたい。

2　移民史に関する最近の研究成果

移民史に関する研究成果にとして、まず、ギ・シャール監修『移民の一万年史―人口移動・遙かなる民族の旅―』を紹介しなければならないだろう。本書は、「適確な事例にもとづいて、ヨーロッパが初期の時代から経験したすべての移民の原因と、条件と、帰結を確定しようとする。その手はじめとして、古代文明以降のヨーロッパの人口移動の原因にとりくむことにしたい。こうした原因は多様で、なによりもおぞましいが、主要な原因は飢餓と食料不足であり、そこに家畜の新しい放牧地の探索と、新しい耕作地のようなべつの魅力がくわわった」[3]としている。『移民の一万年史』によれば、第一のおぞましいといわれた原因は、大量虐殺、監禁、人種的・宗教的迫害、奴隷化、動物なみの地位に追いやられる極端な服従状態などがかきたてた不安であった。第二の肌寒い思いをする原因は、もちろん飢えだった。もっとも先進的な移民は、わず

2　金哲雄『ユグノーの経済史的研究』ミネルヴァ書房、2003年、161～238ページ参照。

3　Guy RICHARD, *AILLEURS, L'HEBE EST PLUS VERTE: Histoire des migrations dans le monde*, Panoramiques-Corlet, 1996. ギ・リシャール監修、藤野邦夫訳『移民の一万年史―人口移動・遙かなる民族の旅―』新評論、2002年、６ページ。

かばかりの商行為を試みたが、別の移民は売るべき労働しか持っていなかった。最後に明白に魅力ある原因として、アメリカ大陸での金に対するスペイン人の渇望、ほぼ同じ時期のアメリカ西部で、農民に対する無料で無限の土地へのアングロサクソン人たちの夢が挙げられている。移民と植民地化は、実際にはたちまち同意語となったとされている[4]。

『移民の一万年史』は、現生人類の誕生以後のほぼ一万年にわたる移民史を、次のような構成で概観している。「第Ⅰ部　地球規模の移民」（第１章　古代文明、第２章　ゲルマン民族の大移動、第３章　ヨーロッパをめぐる喧噪、第４章　白人の人口爆発、第５章　現代社会）、「第Ⅱ部　移民の個別史」（第６章　アフリカの移住、第７章　スペイン領土内の移住、第８章　ラテンアメリカ、第９章　アメリカの移住、第10章　インドの移住、第11章　中国の移住、第12章　オセアニアの移住）が言及されている[5]。本書の価値は、移民と近代資本主義の関連が鮮明でないものの、以上のような構成により、地球規模の移民の軌跡を、その原因と、条件と、帰結を確定しながら全体的に概説しているとともに、欧米のみならず、中国の移住などのアジアを含めた、各地域を個別的・具体的に説明していることにある。

次に、移民史に関する、もう一つの注目すべき研究成果として、ラッセル・キング編著『移住・移民の世界地図』を挙げることができる。本書の「はじめ」では、移住＝移民（migration）は今日の世界の中心的課題であり、何百万人という人々に抑圧や貧困から逃れる手段を与え、個人とその家族の生存と時に繁栄を保障しているとし、そして、移住について「移住とは何にもまして空間的な出来事である。地理的に距離をおくことであり、複数の境界を越えることであり、さまざまな土地に移動し住みゆくことである」[6]と定義する。しかしこの単純さの背後には、空間的パターンや、時間的経過による変化、移動のタイプと形態、原因と結果のような非常に多くのヴァリエーションと複雑さが存在し、移民の研究には、強制的／自発的、一時的／永続的、合法的／非合法的、

4　同上、９ページ。
5　同上、12～17ページ。
6　ラッセル・キング編著『移住・移民の世界地図』、11ページ。

国内移動／国外移動、熟練的／非熟練的などの二元論がつきまとっていると指摘する[7]。本書の目的は、細部への掘り下げが不十分であるなど、課題が残されているが、これらの多様で複雑な、そして哲学的な問題に一定の答えを出すことである。

『移住・移民の世界地図』は、「第１部　大いなる物語：時代を超えた移住と移民」、「第２部　移動する世界：現在のグローバルな移民パターン」、「第３部　移住＝移民の時代：人の移動によるハイブリッド・アイデンティティ」で構成されている。本書の価値は、移住＝移民の歴史を人類の歴史のなかに位置づけていることである。「出アメリカ」から始め、アメリカ大陸への人間の到達、古代ギリシアから繰り返された商業目的の移住、奴隷貿易等による強制移住、ヨーロッパからアメリカ大陸への移住など、移住＝移民の歴史について、第１部において、「黎明期の移住」、「地中海の放浪の旅」、「奴隷の強制移住」、「年季奉公労働者の移住」、「大移住」、「イタリアからの移民」、「移住による国家形成」、「植民地化に伴う移住」、「ディアスポラ」という順序で展開している。こうした歴史を踏まえることによって、今日の文化的多様性や地域的特性を理解することができるとしている[8]。

日本における移民史に関する最近の研究成果にとして、まず、弘末雅士編『越境者の世界史―奴隷・移住者・混血者―』について言及しておきたい。本書は、異なる世界や社会間の交流を仲介してきた「人々が内と外との仲介や社会統合に果たした役割を世界史規模で展開し、それらの比較をとおして近代移行期におけるその変容過程を体系的に考察したものである」[9]。複数の世界秩序を有した前近代において、広域世界と地元社会との関係が近現代よりも多彩であった状況下で、外来者が他地域との交流をはかるためには、異なる世界や社会の間を仲介する人々の存在が欠かせなかった。その後、一つの世界秩序を掲げる近代へ移行すると、広域秩序と地元秩序の関係は変容を余儀なくされたと

7　同上。
8　同上、３～７ページ。
9　弘末雅士編『越境者の世界史―奴隷・移住者・混血者―』春風社、2013年、７ページ。

している[10]。

『越境者の世界史』は、「第Ⅰ部　前近代における隷属の多様性・流動性と近代におけるその変容」、「第Ⅱ部　広域秩序と地域秩序の仲介者」、「第Ⅲ部　両義的存在を否定した近代と新たな仲介者」で構成されている。第Ⅰ部では、奴隷の歴史を体系的に取り上げられ、彼らは、古代地中海世界やイスラーム世界、近代ヨーロッパ人の海外進出においてその展開を支えた重要な存在であり、さらにアメリカ大陸におけるヨーロッパ勢力の経済開発において労働力として欠かせぬ存在であったと指摘している。第Ⅱ部では、イングランドのオランダ人やワロン人移民をはじめ外来者にとって、同じ出身地の仲間が集う宗教施設や同郷団体は、新天地での活動や情報交換に重要な役割を担ったとしている。第Ⅲ部では、これらの仲介者の近代における変容過程を描いている。奴隷制は19世紀欧米社会で、その植民地や非欧米社会でも廃絶されたが、同時に台頭した人種主義の影響で、民族集団の差異が強調され始めた。また世紀転換期に、トリエステが共存の都市文化を失ったことを、その一例として挙げている[11]。本書の価値は、本格的な経済史的アプローチからの分析がないものの、こうした越境者の近代移行期における変容過程に正面から光を当てた点にある。

また、日本における移民史に関する最近の研究成果、として、内田日出海・谷澤毅・松村岳志編『地域と越境―「共生」の社会経済史―』を挙げることができる。本書は地域と越境をテーマにした歴史的研究であるが、越境を社会経済史的アプローチから捉えている点で、拙著『ユグノーの経済史的研究』と関連して重要だと考える。それゆえ、以下、より詳細に紹介したい。

本書では、近現代の人間は、概して「グローバル」、「ナショナル」、および「リージョナル」の三層の社会経済的な枠組みのなかで生かされているとされる。本書が目指すところは、「ナショナル」な次元の研究を、「グローバル」の次元からではなく、「リージョナル」な次元から捉えなおすことである。したがって、本書は、地域史研究の一つとして、越境と「共生」の諸相を探る作業を通じて、近現代史の「ナショナル」な部面を逆に内から横から照らし出すこ

10　同上、6ページ。
11　同上、7～8ページ。

とを狙っているのである。そして、副題の「『共生』の社会経済史」は、越境と「共生」が常態化していくという意味をこめている。本章の各論考は、多かれ少なかれこうした共通認識に立って執筆されており、全三部11の論文で構成されている。研究対象時期は16～20世紀、その地域はヨーロッパからロシアを経てアジアへという順序となって展開されている。それぞれの論文の目的は次のとおりである[12]。

第Ⅰ部「西ヨーロッパの越境世界」では、谷澤毅「ハンザ衰退期におけるブレーメンの対ハンザ関係と商業」は、ハンザ衰退期にもかかわらず、16～17世紀「ナショナル」の次元で経済的利害を追求し始めた、ブレーメンが通商においてイベリア半島にまで進出するなど、越境への志向を強めるなかでのブレーメンの対ハンザ関係と商業について検討している。川崎亜紀子「アルザスユダヤ人問題再考」は、アンシャンレジーム末期にフランス・アルザス地方でユダヤ人、セールベールの仲介役を通じて越境と「共生」の一例を提示し、改めてアルザスユダヤ人の問題を考察している。内田日出海「19世紀の『密融資本主義』」は、密輸の視座から、フランスのアルザスを中心とする上ライン地方のその実態を探るなかで、「ナショナル」の次元の関税と司法・警察制度における近代化過程の一側面を照らし出している。尾崎麻弥子「19世紀におけるスイス-フランス国境地域のナショナル・アイデンティティと経済実態」は、主としてジュネーヴとその周辺地域を対象とし、その当該地域の「ナショナル・アイデンティティ」と、伝統的に存在していた地理的・経済的な「共生」の実態がどのように変化したのかを検討している。

第Ⅱ部「ロシアからアジアへ」では、松村岳志「1810－1820年代のロシア国軍おける体罰」は、ロシア本国に配置される場合と、越境してフランスに至った場合での二人の高級将校の体罰の比較を行いながら、ロシアの軍制史のなかに見られた制度的越境について考察している。鈴木健夫「スターリン体制を逃れるロシア・ドイツ人」は、18世紀末以降にドイツ各地からロシアへ越境した後、1930年前後に「スターリン体制」を忌避してシベリアから中国に逃げてき

12　内田日出海・谷澤毅・松村岳志編『地域と越境―「共生」の社会経済史―』春風社、2014年、２～19ページ参照。

たドイツ移民の越境の具体的な歴史を明らかにしている。高橋周「近世日ロ国境の構築と漁業」は、18世紀末にロシアの接近を受けた江戸幕府が、それまで曖昧であった日ロの境を明確にせざるを得なかったこと、そこで漁業の開発を行う必要があったことを明らかにしながら、初期のエトロフ島漁業の特色を論じている。

第Ⅲ部「アジアの越境世界」では、辻智佐子「明治初期のアメリカ・プロテスタントの活動と日本組合教会」は、近代日本の経済発展を支えた地域産業とキリスト教の関係を考察するための布石として、明治初期のアメリカ・プロテスタントの活動と日本組合教会の設立について取り上げ、信仰と精神性をめぐる二重の越境と「共生」のダイナミックな伝道の歴史を論じている。李秀充「近代開港場の形成と商人」は、近代東アジア地域における商人の越境や「共生」という観点から、近代期の朝鮮における開港とそれに伴って起こった、「客主」という朝鮮人商人と、中国人商人、日本人商人間の競合的「共生」の動向を考察している。四方田雅史「日本と中国における企業文化の『基層』をめぐって」は、近代日本と中国の企業文化を比較し、この二つを、前近代の東アジアにおける「理念型」と捉え、その相違が国際社会で共生しうる条件づくりの一助となりえるとしている。三田剛史「ツバルの華人—台湾との関係を中心に」は、とくに20世紀末からの越境した華人の経済活動について明らかにするとともに、ツバルにおける華人社会の態様とその現地社会との関係を考察している。

本書の価値について第一に挙げられるのは、越境した地域の歴史研究に、「リージョナル」な次元から捉えなおす、新たな視座を加えていることである。本書は、世界資本主義や世界システムの議論のなかで「グローバル」な歴史叙述が模索されている状況にあって、越境と「共生」の諸相を探る作業を通じて、近現代史の「ナショナル」な部面を逆に内から横から 照らし出そうとしている。しかも、越境する主体がより積極的に動いてつくりあげた新たな地域を措定し、そこにおける諸々の能動的営みを掘り起こしているのである。それゆえ本書は、越境ないし地域間・異文化接触を近代国家の理念型なシステムのなかの副次的、周辺的な事実として捉えるような伝統的な歴史叙述に対する批判書ともなっている。

本書の価値の第二は、越境を通じて起こる「共生」を社会経済史的アプローチから捉えている点である。越境の背後には、非常に多くのヴァリエーションと複雑さが存在するが、筆者は、そのなかでも経済活動がきわめて重要な意義を持っていると考えている。この視点は、ウェルナー・ゾンバルトの移住論から示唆を得たものである。ゾンバルトによれば、移民はあらゆる移住先で資本主義の形成にきわめて活発に関与したし、その経済活動は16～18世紀の経済史を記述することを意味するとしている。このような視点で筆者も、「ユグノーの経済史的研究」を展開してきた。本書では、ハンザ衰退期におけるブレーメンの商業、アルザスユダヤ人の経済活動、19世紀の密輸資本主義、19世紀におけるスイス-フランス国境地域の経済実態、近世日ロ国境の漁業、近代日本の経済発展を支えた地域産業、近代期の朝鮮における開港場の商人、近代日本と中国の企業文化、ツバルの華人の経済活動など、経済活動が越境、「共生」というキーワードに関連づけらながら詳細に論じられており、そこからは、数多くの重要な内容を学ぶことができるだろう。

以上のような本書の価値とともに、いくつかの論点を提起したい。その論点の一つは、本書の近代資本主義史研究においての位置づけをより鮮明にすべきことである。本書は、16～20世紀が対象になっていいるが、個々の論文が新たな視座に立った地域史の共通テーマにしたがって叙述された、越境における経済活動の事例としては意味を持っているものの、越境者の経済活動が、近代資本主義の発展過程において明確に位置づけられながら、それらの比較を通して体系的に考察されていないのである。越境者の地域における経済活動は、「ナショナル」な部面を照らし出すだけでなく、世界の近代資本主義史においてどのような積極的な意義を持っているかについての解明が必要だと思われる。

第一の論点と関連して第二の論点は、対象の地域がヨーロッパからロシアを経てアジアへという順序しか展開されておらず、16～20世紀を対象にする以上、さらに移住の観点からも、その対象を拡大すべきことである。確かに一部、「アルザスユダヤ人問題再考」、「明治初期のアメリカ・プロテスタントの活動と日本組合教会」などでユダヤ人やプロテスタントの活動が取り扱われてはいるが、ユダヤ人の移住、宗教的に迫害されたプロテスタントの移住、アメ

リカ合衆国への植民、19～20世紀に初頭にかけてのヨーロッパ人のアメリカへの「大移住」、中国人の移住など、これらの移住、越境についても論じるべきではないかという点である。16世紀からの近代資本主義展開過程において移住、越境の歴史がどのような積極的な意義を持っているのかという全体像を解明することが、われわれの課題ではないだろうか。

第三に、越境の原因についてのさらなる掘り下げた分析が必要であると思われる。本書では、越境の結果としての「共生」に対する具体的・実証的分析は成功しているといえる。しかし、なぜ越境を選択するのかという原因に関しては、個々の論文においてブレーメンの対ハンザ関係、ユダヤ人問題、密輸、国境地域のナショナル・アイデンティティ、体罰、「スターリン体制」、国境の構築、プロテスタントの活動、開港、企業文化の「基層」、「ツバルの華人」というキーワードから推測できるものの、それらの比較を通した、その鮮明な全体像が見えてこないのである。

最後に、本書では越境を移住とほぼ同意語で使用可能な箇所が少なからずあると思われるが、今後は、越境、越境者や移住、移民の概念をその相違を含めてより一層、明確に定義する必要があるのではないかと感じた。

以上のようないくつかの課題が残されてはいるものの、本書は、越境史、移民史に関する研究への貢献度の高い研究成果であるといえる。

以上、移民史に関する四つの研究成果を紹介したが、移住、越境と近代資本主義との関連が、それぞれ程度の差はあるものの、決して鮮明であるとはいえない。筆者は、その関連が移民史なかできわめて重要だと考えている。この関連を含めた、これらの研究成果で残された課題解決のヒントを、次に展開するゾンバルトの移住論のなかに探してみたい。

3　ウェルナー・ゾンバルトの移住論と経済史的研究

ゾンバルトは、『ブルジョワ—近代経済人の精神史—』の第24章「移住」について論ずる前に、これと密接に関連する第23章「国家」について言及しなけ

ればならないとしている。ゾンバルトは、「資本主義精神」の形成にとくに影響を与えた部門として、①軍隊組織、②財政制度、③教会政策を挙げる。この教会政策のなかでゾンバルトは教会政策上の行動の一つとして、高度資本主義の形成にとって持つ重要性には国家が（とくに国家教会制度の形成により）政治的あるいは社会的範疇としての異端あるいは非正統の概念および現象をつくりあげたと指摘し、次のように結論づける。「近代国家において完全市民、反市民という、信仰告白によってそれぞれ区別される市民の二つの範疇があり、そのうち国の教会のメンバーである前者がすべての市民の権利を所有しているのに反し、他の宗教のメンバーつまり後者の『半市民』は公職に就いたり、栄誉を授与されることが妨げられ、あるいは困難にさせられている」[13]と。この意味において、ユダヤ人は半市民であったし、そればかりではなく、カトリックの国々ではプロテスタントが、逆にプロテスタントの国々ではカトリックが半市民であった。

信仰告白自体とは完全に無関係に「異端」と見なされるこの「異端」それ自身を、ゾンバルトは「資本主義精神」の一つの重要な源泉であると主張する。それは、公共生活への関与から排除された異端者はおのれのすべての生活力を経済界で発揚しなければならず、経済だけが彼らに国家が拒んだ共同体内部における尊敬されるべき地位を提供する可能性を与えてくれたからである。他方、彼らが経済的能力をいっそう強力に発展させなければならなかったのも、異端者としての地位のために、利益獲得の機会が他の住民層よりずっと困難なありさまになっていたからである。彼らが経済的成功を収めるためには、ただ、細心かつ良心的であること、きわめて巧みな計算術、それに顧客の要求にぴたりと合わせる技術のみが求められたのである[14]。

しかし、ゾンバルトは宗教的・政治的異端者が「異端」よりもはるかに多く資本主義の建設に関与した別の社会現象と密接に結びついていると考えてい

13　Werner Sombart, *Der Bourgeois, Zur Geistesgeschichte des modernen Wirtschaftsmenschen*, 1923, Vorwort. S. 375. 金森誠也訳『ブルジョワ―近代経済人の精神史―』中央公論社, 1990年、385ページ。

14　A. a. O., S. 375f. 同上訳書, 385～386ページ。

る。それは、宗教的あるいは政治的なもろもろの理由で迫害された者が、初期資本主義の数世紀に、一つの国から別の国へと転々として移っていった移住の現象である。すなわち、異端者は移民となるのである。しかしながら、移住の問題が宗教的あるいは政治的理由以外の理由から行われる限り、異端者の移民問題だけにとどめるわけにはゆかないとして、ゾンバルトは「移住」を分離し、かつこれをまとめあげるために第24章全体で言及するのである[15]。

ゾンバルトは、「外国人」を資本主義的組織の創始者、推進者と見なし、「移住」と「資本主義精神」の歴史とのあいだに存在するもろもろの関連を追求することの重要性を指摘する。「移住」には、個々の移住と大量移住とを区別することができる。個々の移住は、個人的きっかけから一家族（あるいはまた数家族）が他の国あるいは他の地方に移住するという事実にもとづいているが、しかし「外国人」の経済生活への影響がもっとも著しく痛感されるのは、一つの国から別の国へと大量移住が行われる場合である。こうした大量移住をゾンバルトは、それが行われた16世紀以後、①ユダヤ人の移住、②宗教的に迫害されたキリスト教、とくにプロテスタントの移住、③海外領土の植民地化、主としてアメリカ合衆国への植民、の３種に区別している[16]。

まず、①ユダヤ人の移住については『ブルジョワ』のなかでユダヤ人が近代資本主義の歴史においてどのように決定的な重要な役割を演じたかが繰り返し記述されている。また、②宗教的に迫害されたキリスト教徒、とくにプロテスタントの移住は、宗教改革が始まって以来、大量移住の性格をとった。もっとも大量の人口を喪失したのはフランスであり、他の国々は自国民を失った数よりも多くのユグノーを受け入れたことがよく知られている。さらに、③海外領土の植民地化については、アメリカ合衆国への植民が「資本主義精神」を、その間に最高の完成度にもたらし、ヨーロッパにおいて初期資本主義が依然として強力に支配していたころでも、アメリカの経済人の精神が、当時の彼らの形態をすでに先取りしていたことが指摘されている。

このように移住について論じたゾンバルトは、「移住」という「社会的状況」

15　A. a. O., S. 379. 同上訳書, 389～390ページ。
16　A. a. O., S. 380, 382. 同上訳書, 391～392、393～294ページ。

が「資本主義精神」の強力な発展の根拠、この精神の源泉であるという見解に到達する。このことを説明するためにゾンバルトは、資本主義的変種（すでに資本主義的な経済人にまで発展した人々か、そうでなければ、こうした存在になる最良の傾向のある人々かのいずれか）を移住に導くような原因、選択過程を問題にして、次のように語る。「移住しようと決意した個人…は、活動的で意志が強く、やる気十分で大胆、それでいて計算にたけており、感傷的なところはまったくない性質を備えている。…まさに故郷における圧制こそ、われわれがすでに確認したように、資本主義的修業のための最良の予備校である。しかしこの移住によって、これら圧迫された者のなかから、自国で適合や追従によりおのれの生活を維持することに飽き飽きした者が選択されることになった」[17]と。

そして、このような移住する以前から高度の訓練を受けた者たちが、ひとたび外国に赴くやいなや、それぞれ拡散したということだけでも、「資本主義精神」の広範囲な発展に大いに寄与したのは当然である、とゾンバルトはいう。これら移住者のだれもがひとたび足を踏み入れた土地ではまるで酵素のようにあたりの環境に作用する一方、こうしたフランスのように、こうした資本主義的素質を持つ個人が失われた国々では必然的に資本主義的緊張の減少を経験しなければならなかったのである[18]。

17　A. a. O., S. 392. 同上訳書, 404ページ。なお、ユグノーの亡命に関しては、宗教が唯一の要因ではなかったとする見解がある。それによれば、確かに、宗教的ジレンマが信心深いユグノーの亡命を促すものであったが、しかし、移住の社会経済的機会もまた、その選択過程を決定する役割を果たした。お金、技能、そして情報ネットワークを持つユグノーは、より一層思い切って亡命を試みることができた。彼らはどこに、どのようにいくべきかを知っており、外国で生計を立てることができると確信していたのであった。移住者は伴う危険よりも利益を重視するので、移住というものは、合理的な費用便益の結果なのである。ユグノーの場合、旅行費用、逮捕の可能性、財政の不安定よりも、その費用便益が重視されたとする（David van Linden, "The Economy of Exile: Huguenot Migration from Dieppe to Rotterdam, 1685-1700," Jane Mckee & Randolph Vigne, *The HUGUENOTS FRANCE, EXILE & DIASPORA*,, 2013, p. 108.、金哲雄「オランダのユグノー印刷・出版業と「文芸共和国」」大阪経済法科大学『経済学論集』第37巻第２号、2014年３月、６～９ページ参照）。

18　A. a. O., S. 393. 同上訳書, 404～405ページ。

ゾンバルトは、「移住」はその結果生じたすべての古くからの生活習慣と生活条件との断絶によって、「資本主義精神」を発展させたとし、第2の故郷における「外国人」の精神的な動きについて次のように述べている。「彼が、営利へ大きな関心を寄せていることがわかったとき、われわれは彼には、実業につく以外ありえなかったことをただちに理解しなければならない。それというのも、そもそも外国人にとって、他の職域で活動することができないからである。出身国の文化国家において、彼は公共生活への関与から除外されていた。そして植民地ではそもそも、ほかの職業がない。異国においては、それにありとあらゆるたのしい生活の享受は禁止されている」[19]と。

さらに、ゾンバルトは「移住者にとっては…何らの過去もなく、はたまた現在もない。彼にとって存在するのは、ただ未来だけである。はじめて金銭が関心の中心になったときも、彼にとって金銭の獲得は、その助けをかりておのれの未来をつくりあげる手段としてのみ意味があるように思われる。彼はひたすらおのれの事業活動を拡大することによってのみ、金銭を獲得することができる」[20]と指摘する。

移民は、あらゆる移住先で資本主義の形成にきわめて活発に関与したし、すべての国々は、銀行組織、それに主として工業面で彼ら移民による本質的推進の恩恵を受けたのである。そして、このことを詳しく証明するのは16、17及び18世紀の経済史を記述することを意味する、とゾンバルトは指摘する[21]。このようなゾンバルトの見解は、移民史研究にとって、とても重要な示唆を与えてくれている。移民の経済史的研究は、16～18世紀の近代資本主義研究においてきわめて重要な意義を持っているといえる。

19 A. a. O., S. 393F. 同上訳書, 405ページ。
20 A. a. O., S. 395. 同上訳書, 406～407ページ。
21 A. a. O., S. 384f. 同上訳書, 395～396ページ。

4　移民史研究における「ユグノーの経済史的研究」の意義

ユグノーの移住については、前述したギ・シャール監修『移民の一万年史』の第Ⅰ部「第３章　ヨーロッパをめぐる喧騒」の「三　迫害」におけるほとんどが、その記述にあてられている。ナント勅令廃止（ルイ14世が1685年10月18日に廃止した）に伴ってユグノーの移民は、「18世紀のフランスでは10万人以上にもなった。フランスの最終的な移民の大部分は国際的移民であり、イギリスの移民と比較することはできない。大きな比率をしめたユグノー［16～17世紀のカトリック派がカルヴァン派のプロテスタントをいやしめて呼んだ名称］の集団移動は、ほかの王国のあらゆる脱出をしのいで多かった」[22]のである。

フランス人の集団移住は、宗教戦争と最初の迫害が生じた1522年から、宗教上の理由で始まった。とくにサン・バルテルミーの虐殺（1572年８月24日のサン・バルテルミーの祭日に起きたプロテスタントの虐殺事件）ような暴力事件が突発するたびに、移住の動きが加速された。「宗教的亡命」は、ヨーロッパのすべての国々（イギリス、オランダ、プロシア、ザクセン、そのほかのドイツ諸国、スイス）に見られた現象であり、フランスでは何千人というユグノーが、1522年から1685年に故国を離れた。ナント勅令廃止で集団移住はさらに加速し、1685年から1689年にかけては、20万～30万人の人たちがフランスを脱出した。「宗教的亡命」のための離国は、北フランスでは40％にも達した。それに対して、南フランスの頑固な信者たちは1685～1715年、3000人が監視人に追跡されて、ガレー船（18世紀まで使われた、帆と奴隷や囚人がこぐ櫂で走る軍船と商船）に送り込まれた。カナダやアンティル諸島へのフランスの移民は、極度に勢いが弱かった。カナダでは、17世紀のフランス移民の総数は２万7000人であり、うち１万3000人が兵士であった。アンティル諸島では、フランス移民の人数は20万人に達したことがなかったが、より情熱的で、人の数も多かった[23]（表１参照）。

22　ギ・リシャール監修『移民の一万年史』、59ページ。
23　同上、59～60ページ。

表1　フランスのプロテスタントの宗教的亡命

時　期	移　住　先	規　模（人）
1522～1685	国外	数千
1685～1689	〃	20万～30万
1685～1715	ガレー船	3000
17世紀	カナダ	27000
〃	アンティル諸島	20万未満

（出所）ギ・リシャール監修、藤野邦夫訳『移民の一万年史―人口移動・遙かなる民族の旅―』新評論、2002年、60ページ。

このユグノーの移住数については、シャルル・ヴァイスの場合、ナント勅令廃止後、25万人から30万人（その頃フランスに居住していたプロテスタント一般、100万人のうち）と推定している[24]。しかし、ここで問題になるのは、移住者数の多寡ではなく、むしろ宗教的に迫害された移住者が資本主義組織の形成に果たした役割の大きさを明らかにすることであろう。

ドイツの諸国家は、オーストリア、スコットランドそしてフランスから大量の移民を受け入れたが、とくにユグノーは、スコットランド人とともに、「資本主義精神」の代表者となった[25]。ゾンバルトは、17及び18世紀におけるドイツの経済生活のなかで、ユグノーが演じた役割について次のように詳細に述べている。

「彼らはいたるところで、とくに資本主義的工業をまったくはじめてつくりあげ、個々の巨大な商業分野（たとえば絹製品）をほとんどすべて手中に収めていた。フランス人避難民のもっとも重要な居住地は、ザクセン選帝侯国、フランクフルト・アム・マイン、ハンブルク、ブラウンシュヴァイク、ヘッセン辺境伯国（カッセル！）、そして、とりわけブランデンブルクープロイセンであった。フリードリヒ・ヴィルヘルム１世、フリードリヒ２世の統治下に受け入れられたフランス人の数は２万5000人とみられており、そのうちベルリンだけでも１万人が居住した。

24　Charles Weiss, *Histoire des Réfugiés Protestants depuis La révocation de l'Édit de* Nantes, I, Paris,1853, p. 104.

25　Sombart, a. a. O., S. 385. 金森前掲訳書, 396ページ。

避難民はいたるところで『集団的手工業』の組織を、したがってそのようにいってもよければ、資本主義的家内工業を導入した。それは主として、毛織物の生産について行なわれた。たとえばマクデブルク（1687年、ニームのアンドレ・ヴァランタンとモンペリエのピエル・クラパレードは、織械をあつかう100人の工員と400人の紡績女子工員を働かせた)、ハレ［ザーレ湖畔の都市]、ブランデンブルク、ヴェストファーレン、ベルリンでそれに従事したが、絹物工業にも関係した。

フランスのおかげで創設され、資本主義的意味で発展した他の工業は、靴下の生産、帽子の生産（1782年、37人の工員を擁する最初の帽子工業は、ベルリン在住のあるフランス人によって創設された)、皮製品、手袋、文房具、トランプ、亜麻仁油、高級石鹸（1696年、最初の高級石鹸工場が、あるフランス人によりベルリンにつくられた)、照明器具、ガラス、鏡、など。

ベルリンにおける、毛織物、絹織物の同業組合員386人のうち、1808年のはじめになっても、まだ81人のフランス人の名前がみられた][26]。

オランダは７州の分離独立以来、ありとあらゆる種類の移民の移住場所となり、異教徒、ユダヤ人、キリスト教徒、カトリック、プロテスタントを問わず、商工業上の利益をもたらすことを約束するすべての者を受け入れた。そして、彼らによってアムステルダム、ライデン、ハーレムなどが利益を受けた。とくに、ユグノーは（その移住数は５万5000から７万5000人）は、新しい資本主義的工業の導入に巧みであったことを、ゾンバルトは指摘する。ユグノーによって導入された工業は、まず第一に織物（絹物）工業であり、ついで帽子製造、製紙、書籍印刷であった[27]。

イギリスにおいても、資本主義的発展が本質的に外国からの移住者によって促された。事実、16および17世紀、主としてオランダとフランスからやってきた移住者は、イギリスの経済生活に深い影響を与えたのである。17世紀、イギリスに渡来したユグノー移民の数もかなりあった。その数は約８万人といわれ、その約半数がイギリスからさらにアメリカに移住したのである。しかもイ

26　A. a. O., S. 386F. 同上訳書, 397～398ページ。
27　A. a. O., S. 387F. 同上訳書, 398～399ページ。

ギリスに赴いたのは、まさに富裕なユグノーであったのである[28]。

ゾンバルトは、外国からの移住者は、もともと創始者の風格があり、商工業の多種多様な領域でおのれの企業的な精神を活動させたと指摘し、彼らによって絹物工業、ヴェールと高級白麻織物工場、絨毯織物工業、帽子製造業が導入されたことを挙げている。とくに、キャラコの捺染業は1690年にあるユグノーによって、高級な白麻布製造は18世紀になって、エディンバラ在住のユグノーによって導入されたのである[29]。

スイスの国民経済に及ぼした外国移住者の影響については、トラウゴット・ゲーリングがバーゼル市の商工業に関する美しい本（1868年）のなかで記しており、その第９章で「ロカルノ市民とユグノー教徒」が取り扱われている[30]。

こうしてゾンバルトは、「移住」は「資本主義精神」の形成、とくに高度資本主義的な形成のなかへ変容するための重要な源泉の一つであると主張した。しかし、道徳的諸力、とくに宗教もまた、その重要な源泉の一つであることを、ゾンバルトは考えている。ただ、ゾンバルトにとっては、その宗教的源泉がカトリシズムやユダヤ教であって決してプロテスタンティズムでなかった。

以上のように、ゾンバルトのユグノー論は、第３部「社会的状況」のなかの、とくに第24章「移住」に集中している。ここでまず注目すべき点は、ユグノーがそれぞれの移住先において資本主義の発展に貢献した事実を、ゾンバルトが詳細に展開したことである。ゾンバルトは、ユグノーがプロテスタントであることよりは、「移住」という自己実現の可能性が経済活動の面にだけ許されているという、「社会的状況」を重視している。そして、外国に移住した異端者たちは、ユグノーであれ、ユダヤ教徒であれ、カトリックであれ、その移住先における資本主義の発展に大きな役割を果たしたと考えているのである。

このように、ゾンバルトの移住論など、移民史からユグノーの活動を見る視点は重要である。しかし、この視点は、ユグノーの経済活動を評価する際の一側面に過ぎない。ここに、ヴェーバーのユグノー論を加味する必要があると考

28　A. s. O., S. 388F. 同上訳書, 399～400ページ。
29　A.s.O.,S.389.同上訳書,400～401ページ。
30　A.a.O.同上訳書,401ページ。

える。ヴェーバーは、ユグノーについて『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の第１章第１節「信仰と社会階層」で比較的詳細に語っている。彼は「カルヴァン派の教会が一般に、またとくに信仰闘争の時代にいたるところで『十字架のもとに』あった場合に示したそうしたいちじるしい特徴を、その後も久しくもちつづけ」[31]たと指摘し、ユグノーを「フランス工業の資本主義的発展のもっとも重要な担い手の一つ」[32]と規定する。そして「ユグノーの教会では最初から改宗者の間に修道士と産業人（商人や手工業者）が、迫害の時代にさえ、とくに数多く見出されたというような事実は、まさしく特徴的な、ある意味で『類型的』なこと」[33]と見なされている。

また、ゾンバルトは、「移住」という「社会的状況」と同様に、「宗教」も「資本主義精神」成立の重要な要因（源泉）と見ている。この見解も注目すべき点ではあるが、明らかに彼は、プロテスタンティズムの倫理と「資本主義の精神」との因果関連に関するヴェーバーのあの有名な見解を、真向から否定しているのである。ゾンバルトは、プロテスタンティズムについては資本主義の敵であると見なし、「資本主義精神」成立の要因をスコラ哲学、カトリックの教義、ユダヤ教などに求めているのに対し、ヴェーバーは、「近代資本主義の精神」がプロテスタンティズムの合理的経済精神に起源を持つものとしている。ヴェーバーが指摘するように、禁欲的プロテスタンティズム、カルヴィニズムにおいては、信仰が「救いの確かさ」の確実な基礎として役立ち得るためには、それは客観的な働きによって証明されねばならない。そして、この「職業倫理」こそが、ヴェーバーが「近代資本主義の精神」であると結論づけているところのものなのである[34]。

さらに、ゾンバルトのいう「資本主義精神」(der kapitalistische Geist) とヴェーバーのいう「資本主義の精神」(der Geist des Kapitalismus) とが、奇妙にも乖

31　Max Weber, *Die protestantische Ethik und der 》Geist《 des Kapitalismus, in: Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, Bd. I, 1920, S. 25. 大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店、1988年、17ページ。

32　A. a. O. 同上訳書。

33　A. a. O., S. 26. 同上訳書、19ページ。

34　A. a. O., S. 108. 同上訳書、133～134ページ。

離していることが考慮されなければならない。ヴェーバーによると、「資本主義の精神」の担い手たちのうちには、資本主義と労働者の双方がともに含まれている。そして、資本家も労働者もともに、「中産的生産者層」(die industrielle Mittle-stande) のなかから生まれてきたのである。それに対して、ゾンバルトのいう「資本主義精神」は、「資本家の精神」である。ゾンバルトのユグノー論においても、ユグノーは当然、この範疇内で取り扱われている。第1章で言及したように、資本家としてのユグノーについては、確かに重要な点を含んでいると思われる。しかしながら、ゾンバルトには労働者をも担い手として含む「資本主義の精神」というヴェーバーの問題設定の鋭さが見えておらず、ゾンバルトのヴェーバー批判にはこの点で混乱があるといわねばならない[35]。

最後に、「資本主義の精神」が近代ヨーロッパの諸文化とどういう関わり合いを持つか、という問題である。つまり、ヴェーバー流にいえば、近代文化がヨーロッパ、とくに西ヨーロッパにのみ固有であるという歴史的事情である。これについては、ゾンバルトからは何も聞くことは出来ない。現象だけを見れば、ゾンバルトが挙げるような諸要素は断片的には東洋にも、あるいは古代・中世にも見られるのであって、それが近代ヨーロッパにのみ特異な文化現象として存在したという必然的な理由を、ゾンバルトは説明していない[36] (表2参照)。

表2　ゾンバルトとヴェーバーの見解における比較

	ユグノー	宗教	資本主義（の）精神	時代、地域
ゾンバルト	移民	ユダヤ教	資本家	古代～、すべて
ヴェーバー	プロテスタント	プロテスタンティズム	資本家と労働者	近代～、西欧

確かに、ゾンバルトのユグノー論には「移住」という「社会的状況」を積極的に評価する点で、それは貴重な貢献をなしている。しかしながら、ユグノーを、プロテスタンティズムの意義に基づいて近代資本主義の担い手、と見なすヴェーバーの見解からも追求していかなければならないのである。

35　金哲雄『ユグノーの経済史的研究』、47～48ページ。
36　西村孝夫「ウェルナー・ゾンバルトの市民階級論—精神史社会史的研究の一例—」大阪府立大学『経済研究』第13巻第2号, 1968年, 48ページ。

4　おわりに

本稿をまとめてみると、「２　移民史に関する最近の研究成果」では、ギ・リシャール監修『移民の一万年史―人口移動・遙かなる民族の旅―』、ラッセル・キング編著『移住・移民の世界地図』、弘末雅士編『越境者の世界史―奴隷・移住者・混血者―』、内田日出海・谷澤毅・松村岳志編『地域と越境―「共生」の社会経済史―』を通じて、地球規模の移民の軌跡の原因と、条件と、帰結についての確定とその全体像、移民の研究における強制的/自発的、一時的／永続的、合法的／非合法的、国内移動/国外移動、熟練的／非熟練的などの二元論、移民の歴史の人類の歴史における位置づけ、移民の近代移行期における変容過程、移民史研究における「リージョナル」な次元から捉えなおす、新たな視座、移民の社会経済史的アプローチからの視点などを理解することができた。このような移民史にる関する見解のなかでも、とくに近代以降における移民の経済活動についての論点に注目した。

「３　ウェルナー・ゾンバルトの移住論と経済史的研究」では、「移住」という「社会的状況」が「資本主義精神」の強力な発展の根拠、この精神の源泉であり、移民が16～18世紀、あらゆる移住先で資本主義の形成にきわめて活発に関与した、というゾンバルトの見解について言及した。そして、そのような移民の経済活動が16～18世紀の経済史を記述することを意味する、というゾンバルトの見解の重要性について認識した。

「４　移民史研究における『ユグノーの経済史的研究』の意義」では、ゾンバルトがドイツ、オランダ、イギリス、スイスの移住先においてユグノーが演じた経済的役割について詳細に述べていることを指摘した。このゾンバルトの移住論は、移民史からユグノーの活動を見る視点は重要であるが、しかし、ユグノーの経済活動を評価する際の一側面に過ぎない。ここに、ヴェーバーの近代資本主義論からのユグノー論を加味することによって、ユグノーをどこまでも近代資本主義的発展の重要な担い手として見なければならないのである。この点で、西欧の近代資本主義的発展におけるユグノーの役割が、きわめて重要

な意義を持っているといえる。

当時のイギリス、オランダは、フランスを相手とする重商主義競争を戦い抜いており、三国間における商工業上の差はあまりなかった。一方、これらの諸国に比べてドイツは後進国であり、スイスは、その中間的地位にいたといえる。それゆえ、イギリスとオランダではフランスとの技術的な差があまりないので、ユグノーによる技術の普及はより容易で急速であった。それに対して、ドイツ、スイスではユグノーから多くのことを吸収することができた。とくに、イギリスにおけるユグノーの経済的役割は、より重要な意義を有していた。ユグノーは、イギリスの資本主義的発展に促進的な役割を果たし、イギリスを18、19世紀における指導的地位に押し上げるのに大いに貢献したのであった。また、ドイツにおいて果たしたユグノーの経済的役割は、ドイツ産業革命が19世紀になって始めて開始されたものの、大きかったといえる[37]。

以上、明らかなように、移民史に関する最近の研究成果を踏まえ、ゾンバルトの移住論やヴェーバーの近代資本主義論から、ユグノーの経済活動が移民史、移民の経済史、とくに近代資本主義の発展過程においてどれだけ重要な位置を占めていたかが分かる。

筆者は、拙著『ユグノーの経済史的研究』において、イギリス、オランダ、ドイツ、スイスの移住先におけるユグノーの経済活動を論じてきた。今後は、デンマーク、スウェーデン、ロシアなどにも対象を拡大し、「ユグノーの経済史的研究」をさらに深めていきたいと考えている。

37　金哲雄『ユグノーの経済史的研究』、240～241ページ。